

非言語的コミュニケーションに関するソーシャルワーク演習

- 心理劇におけるウォーミングアップを通して -

松 山 郁 夫

Social Work Practice of Nonverbal Communication
: From the Warming-up Session in Psychodrama

Ikuo MATSUYAMA

要 旨

本研究の目的は、心理劇を活用した非言語的コミュニケーションに関するソーシャルワーク演習の意義を考察することである。ウォーミングアップにおける非言語的コミュニケーションの体験を通じた参加者の気づきや感想を検討した結果、非言語で伝えるには相手に伝えようとする意思、顔の表情の豊かさ、相手との意思の疎通が必要であること、非言語による表現をすると様々なイメージが思い浮かぶだけでなく、イメージや心情を伝える性質を認識するように作用すること、及び非言語的コミュニケーションを体験すると自己覚知を促すこと等が考察された。

Key word : 非言語的コミュニケーション、ソーシャルワーク演習、心理劇、ウォーミングアップ

I . はじめに

認知症や自閉症のある人は、他者とコミュニケーションをとることに支障をきたしやすい要援護者である。

認知症高齢者の場合、知的機能の障害が言語能力に影響を及ぼすことによって、うまくコミュニケーションをとることができなくなり、このことが介護職員の大きな負担となっている¹⁾。しかしながら、注意深く観察して接していけば、認知症が重くても認知症高齢者の表情を読み取ることができ、認知症が進行してもその人自身の精神的な体験は続いているため、自分の気持ちを介護職員に伝えることができるとされている²⁾。認知症高齢者とコミュニケーションをとるためには、その表情に注意しながら、手の動きや身振りを使う必要があり、コミュニケーションをとることができれば、情報を伝達したり気持ちをやりとりしたりすることが可能となる³⁾。

自閉症者のコミュニケーション能力の障害や社会的認知の障害は、対人関係の形成に困難をもたらし、

そのことで不適応を生じる可能性が高い⁴⁾。また、自閉症者は共感性が希薄なため、他者とのコミュニケーションが成立しないことが多く、その心理的特性を捉えることが難しい。さらに、自閉症の多くは知的障害を伴うため、言語理解の遅れを示すものが多い。言語の発達がみられても反響言語があり、相手の意図や周囲の状況に考慮した会話は困難である⁵⁾。

これらの要援護者を支援するにはコミュニケーションをとる必要がある。高齢者とのコミュニケーションについては、心身の障害があればあるほど非言語的コミュニケーションが重要になり、これが感情や欲求あるいは気持ちを言葉よりも強く明確に示す場合が多い⁶⁾。また、自閉症スペクトラムのほとんどは視覚的理解者で、聞くよりも見る方が理解することが容易との指摘がなされている⁷⁾。したがって、認知症、自閉症のある人を支援するには、非言語的コミュニケーションを活用する必要がある。

ソーシャルワーカーは、クライアントの問題解決のために意図的で計画された目的・目標を持ち、課題志向的である。したがって、ワーカーは表情、視線、動作、姿勢、身体的位置・距離・接触、声の調子・抑揚・強弱、間・速度等の非言語的メッセージの伝達を効果的に活用しなければならない。このため、ソーシャルワーカーを養成する教育において、非言語的コミュニケーションについて体験を通して学ぶことが求められる。

教育や訓練のためにも広く活用できる集団心理療法の一技法として用いられる心理劇は、人種差別のような社会的なテーマで行われるときソシオドラマ（社会劇）、教育や訓練などに用いられるときロールプレイングということもある。なお、ロールプレイングは、役割演技を一種のシミュレーションとして技術訓練などに用いられ、参加者の社会性の発達や教育・指導面を強調するのに対して、心理劇は個人のこころの内面の分析に関わる点に特徴があるとされている⁸⁾。したがって、心理劇は、福祉施設等で要援護者の日常生活や相談援助等の支援を行う福祉専門職の養成教育に適用できる方法と考えられる⁹⁾。また、新カリキュラムの相談援助演習に関する文献には、ソーシャルワークでクライアントを理解しようとするときに、話の内容を理解するための思考力だけでなく、気持ちを理解するための感受性と共感的理解が必要との旨が記されている。

以上のことから、本研究の目的は、心理劇を活用した非言語的コミュニケーションに関するソーシャルワーク演習の意義を考察することとする。

Ⅱ．演習の実際

1．心理劇を活用したソーシャルワーク演習

本研究では、2009年度の社会福祉士養成における旧カリキュラムの社会福祉援助技術演習で、心理劇による非言語的コミュニケーションに関する演習に参加した学生の気づきと感想を検討した。参加した学生は初めて心理劇を体験しているため、日常的な場面を題材に参加者全員で劇ができる雰囲気を作っていくウォーミングアップの相で、非言語的コミュニケーションに関する演習を実施した。心理劇については日常の役割と異なった役を演じることで自発性を引き出し、自己理解を深めること、参加者がお互い親しくなれるようにすること、及びありのままの自分を表現すること等の実施上の注意事項を説明した。また、心理劇の手順については、ウォーミングアップ（第1相）、劇化（第2相）を経て、シェアリング（第3相）で演者は感じたこと等を話すようにする¹⁰⁾との解説をした。

本研究では、心理劇のウォーミングアップ（第1相）において、非言語的コミュニケーションについての理解を深めることを目標に、11人の学生を対象に行ったウォーミングアップの場面について検討する。この演習は、机や椅子を動かして心理劇ができるスペースが確保できる講義室で1コマ（90分）実施した。

なお、倫理的配慮として、事前に学生に行った演習後に書いた文章を心理劇の活用に関する研究に使用することがあるが、個人のプライバシーは保護されること、文章に関する授業成績への影響はないことを説明し、全員から同意を得ている。

2. 演習の概要

(1) 演習のテーマ

演習のテーマは、心理劇のウォーミングアップで参加者が非言語で季節の表現を行うこととした。

(2) 演習の目標

演習の目標は、小グループで寸劇として言葉を使わずに動作や表情等で季節を表現すること、及び演じた後、非言語による表現に対して抱いた感情や考えを述べることとした。

(3) 演習の手順

演習の手順として、各自が動作だけで演じてみたい季節を1つ選択し、同じ季節でグループとなって20分程度で選択した季節をどのように表現するのかについて意見を出し合うこと、表現したい場面をイメージしながら構成していくこと、役を演じる際複数の役を演じて構わないこと、及び場面の構成がまとまったら各グループで10分程度リハーサルを行うことを教示した。グループの構成人数は夏を表現する6名、冬を表現する5名の2グループで、各グループの代表者でジャンケンをして演じる順番を決定した。夏、冬の順番でグループごとに言葉を一切使わず、非言語による季節の表現を行い、演じていないグループのメンバーは観客となった。演じた後、演者と観客が共に気づいたことや感想を述べるようにした。その後、各参加者にA4の紙1枚を配布し、20分程度で演じてみて気づいたことや感想を箇条書きで記入してもらった。

3. 演習の実例

(1) 夏を表現すること

1) 演じている様子

夏を演じるグループのテーマは、仲が良い男性と女性の6人のグループで一緒に海に行き、夏の遊びを楽しむ様子を表現することにした。演じられたのは、待ち合わせ、車内、ビーチバレー、海水浴、スイカ割り、バーベキュー、花火、片付け、帰宅の場面で、その詳細は次の通りであった。

場面①：待ち合わせ

時計を見たりしながら待ち合わせの場所に人が集まりだし、約束していた5人が揃った。しかし、乗せてもらうはずの車がなかなか来ないため、5人共イライラした表情になってしまった。

場面②：海へ向かう車中の様子

みんなを乗せて海に行く予定の車はかなり遅れて到着した。待ちくたびれた表情の学生は、運転する学生に理由を聞くことと寝坊したとのことだったため、みんな険悪な表情となり、息詰まる雰囲気の中でワゴンタイプの車に乗り込み、海へと向かうことになった。運転する学生は同乗者から冷たい視線を受けながらも海を目指してドライブをする。海に近づくにつれて車の中の雰囲気は和んできて、徐々にみんな笑顔は増え、ポテトチップスを食べたり、ジュースを飲んだりしながら、話も弾み、楽しそうな雰囲気になり、着いたときにはお喋りで盛り上がっていた。

場面③：海に到着時

海に到着して浜の前の駐車場に車を入れ、車から降りたときに眩しそうな顔をする者、炎天下のため吹き出す汗を拭う者、及び太陽がまぶしくて慌てたような仕草でサングラスをかける者もいる。

場面④：ビーチバレー

砂浜でビーチバレーをすることになった。審判の笛を吹く合図（仕草で示す）で試合となり、ネット役が両チームの真ん中に立ち、両チームはサーブを打ったりアタックをしたりした。3戦を行い3対0のストレートで女性チームの圧倒的な勝利となり、女性チームの2人は飛び上がって喜び、負けた男性チームの2人は地面を叩いて悔しがった。その後表彰式となり、勝った女性チームの2人はトロフィーをもらって、観客に高々と持ち上げたトロフィーを見せてアピールした。

場面⑤：海で遊ぶ

炎天下（太陽役になった1人が手をじりじりと伸ばす仕草を繰り返し、表情も合わせて炎天下であることを表現する）でのビーチバレーでみんな大汗をかいたため、海に向かって突進し、海水浴を行う。最初はみんなで水をかけ合って楽しむ。その後、水浴びを行う者、本気でクロールで泳ぐ者、背泳ぎをする者、平泳ぎで軽く泳ぐ者とそれぞれ様々な泳ぎ方をする。途中で溺れる者もでたため、全員で救出に向かった。その後、サーフィンをしたり、手漕ぎボートに乗って權で漕いだりする。

場面⑥：スイカ割り

泳いだり、サーフィンをしたりして皆疲れてしまったため、のんびりと浜でスイカ割りをすることになった。目隠しをされ、みんなで回転させた学生は、スイカへ向かって棒を振り上げながら歩いていく。スイカの方へ誘導するために手をたたくしぐさを行う者もいた。声を出すふりや手を叩くふりをしながらスイカ割りが進行し、ついに棒がスイカに当たり、大きく割れた（スイカの役がスイカの割れる様子を動作で表現した）。その後、割れたスイカをみんなで手に取って、おいしそうに食べた。

場面⑦：バーベキュー

その後、バーベキューをすることになり、バーベキューの準備が始まり、うちわであおいで炭に火をおこし、バーベキュー台に肉をおいて焼き、みんなで囲って取り合うようにして焼肉を食べた。肉をひっくり返したり、焼けた肉に息を吹きかけてから食べたりする。楽しそうな表情を浮かべて、みんなでお腹がいっぱいになるまで食べた。大きくなったお腹に手を当てて動けなくなった者もいた。

場面⑧：花火

バーベキュー終了後、日が沈み暗くなってきたため花火をすることになった。みんなで手に花火を持って楽しんだ後、みんなで噴き出し花火を置いて導火線に点火して後退した。その直後、ものすごい勢いで火が噴き出した（噴き出し花火役が全身で上に向かって勢いよくふきだす花火の様子を表現した）。みんなはうれしそうな表情ではしゃいだ。その後、打ち上げ花火の準備が始まり、花火役が花火の打ち上がって広がっていく様子を動作で表現し、みんなで花火を見上げて笑顔で拍手した。最後に線香花火をすることになり、誰が最後まで残るかを競い合うことになった。線香花火が早く落ちた者は悔しがり、最後まで残った者の勝ちとなり、勝った者はガッツポーズをして喜んだ。

場面⑨：片づけ・帰りの車内

みんなで花火やゴミの後片付けをして、荷物をまとめ、帰る準備ができた。車に乗ったら、疲れが出て、みんな車の中で眠ってしまった。運転手も眠くなるがなんとかみんなを降ろす場所に到着し、全員疲労感を漂わせながら車から降り、お互い握手してから解散となった。

2) 演じて気づいたこと

①非言語による表現

- ・内容を詰め込みすぎたのに観客には演じたことが伝わっていた。
- ・声を出さなくても動作で伝えられる。

- ・楽しそうな雰囲気は表情で伝えられる。
- ・季節を身振り手振り等の動作だけで表現するのは難易度がかなり高い。
- ・どのようにしたら場面が観客に伝わるのかをよく考えないといけない。
- ・ストーリーを打ち合わせしていても、各演者はその場の雰囲気に合わせて自主的に演じていた。
- ・非言語だけで演じる場合、各自の自由意思に任せた表現が多かったように思う。
- ・非言語で表現する場合、ストーリーがある方が観客にとって面白く見ることができる。

②非言語で伝える技術

- ・細かすぎる表現はわかりにくいように感じた。
- ・簡単で比較的短い内容の方が相手には伝わりやすい。
- ・各自が同時に様々な動作をするよりも一緒に同じ動作をする方が観客には分かりやすい。
- ・非言語表現だけのときは演じる人の表情や動作は大きめの方が伝わりやすい。

③無生物の表現

- ・人が行う動作だけでなくビーチバレーのネット、スイカ、花火等の無生物も動きで表現できる。
- ・スイカ、花火等無生物を人が動作で表現しても不自然な感じがしないし、観客に伝わる。

④言語的コミュニケーション

- ・動作だけで演じてみると、言葉の方が詳細に短時間で表現できると思った。
- ・動作だけで演じてみると、言葉はすごく重要なコミュニケーション手段であると思った。

3) 演じた感想

①演技前の非言語による表現のイメージ

- ・非言語で言葉を発さないというだけでも難易度が高いと思った。
- ・ストーリーを他者に伝えるというのは不可能で、取り組んでもとても大変になると思った。
- ・非言語、つまり動作で表現すると聞いてそれは無理なことで言葉でないといえられないと思った。

②非言語による演技の伝わり方

- ・演じている側は内容が分かっているから楽しかったが、観客に伝わっているかどうか不安だった。
- ・非言語で伝えるのは難しいと思っていたが、観客の感想を聞くと意外に伝わっていると思った。
- ・観客の感想を聞いてみるとかなり伝わっていることがわかり、安心した。

③非言語による表現の戸惑い

- ・演じているとき、観客にきちんと伝わっているのかがわからず不安だった。
- ・動作で季節を表現するのは相手に伝わっているのかがわからず、独りよがりになっていそうで不安だった。
- ・海水浴の場面において周囲と離れて1人で泳ぐ動作をしていたのは虚しく、怖かった。
- ・周りの反応を見て伝わっているのかが不安だったが、観客の感想を聞くと伝わっているようで安心した。

④非言語による表現の難しさ

- ・リハーサルでは確認のために声を出して表現していたので、本番で動作だけで表現しようとしたら予想外に難しく、戸惑ってしまった。
- ・言語を使わずに動作だけで表現することがあれほど難しいとは思わなかった。
- ・その場のノリで動いていたところがあったため、もう少し考えて表現するべきであった。
- ・人数に応じて協力した表現を行いたかった。

・話すことができない人のコミュニケーションがいかに難しいかを実感したように思う。

⑤非言語による表現での留意点

・非言語で表現する場合、観客の気持ちを察したり、わかりやすいように配慮したりする気遣いが必要と感じた。

・相談場面であるならば、クライアントにいかにか情報を正確に伝えるかが重要だと思った。

・演じるのを恥ずかしがってはいうまく演じることができないし、観客に伝わらないと思った。

⑥非言語による表現の楽しさ

・言語の代わりに動作で行くと、いろいろと工夫をすることが多かったため面白かった。

・言葉を使わずに表現すると、人の役だけでなく物の役になっても表現できると思った。

・その場の雰囲気は表情で伝えられると思った。

・様々な役や場面が設定できるため演技では盛り上がり、とても楽しかった。

・表現の仕方次第で新しく場面が展開していくためとてもやりがいがあると感じた。

(2) 冬を表現すること

1) 演じている様子

冬を演じるグループ5名のテーマは、クリスマス・イブからクリスマスの朝までをサンタクロース役(雪だるま役も兼ねる)、トナカイ役2人(この2人は子供の父母役も兼ねる)、プレゼントを待つ2人の子供役(男の子)の5役を5名で配役して、表現することとした。演じられた場面は雪遊びをした後、大きな煙突のある家でサンタクロースが来ることを楽しみにしている2人の子供がクリスマスケーキを食べた後眠っている様子、トナカイが曳くそりに乗ったサンタクロースが2人の子供のもとにやってくる様子、サンタクロースが子供たちの枕元にプレゼントを置く様子、2人の子供(兄弟)の寝顔を見て微笑んだサンタクロースが去っていく様子、プレゼントをみた2人の子供が喜ぶ様子、その様子を上空で見て微笑むサンタクロースの順番で演じられた。その詳細は次の通りであった。

場面①：雪遊びの様子

雪が降ってきて2人の子供も大喜び。2人で一緒に雪だるまをつくり、巨大な雪だるまが出来上がる。雪だるまに雪玉を投げると怒った雪だるまが2人の子供をも追い掛け回し、子供もはびっくりしながら逃げ惑う。その後、2人の子供は雪だるまに謝り、雪だるまは笑顔になって動かなくなる。

場面②：クリスマスケーキを食べる

家の中に入り、雪だるまを作ったことや雪だるまに追いかけられたことを両親に話しながら、クリスマスケーキを家族で食べた。その後2人は眠くなってくる。

場面③：2人の子供が眠っている

雪が降り続くなかで(雪役が手を動かして雪が降っていることを表現する)、2人の子供は、大きな煙突のある家でサンタクロースが来ることを祈って、眠ってしまった。

場面④：サンタクロースの登場

2匹のトナカイが曳くそりに乗ったサンタクロースが空から現れる。トナカイは指で角をつくってトナカイのように見え、サンタクロースはプレゼントを背負っている感じの仕草で登場した。

場面⑤：サンタクロースが2人の子供の枕元にプレゼントを置く

2人の子供のいる煙突から家の中に入り、眠っている2人の子供のいる部屋に入り、静かに忍び寄る感じで、眠っている子供の枕元にクリスマスプレゼントを届けた。

場面⑥：サンタクロースは去っていく

2人の子供の寝顔を見て微笑んだサンタクロースは、眠っている2人の頭を撫でて、起こさないように気を付けながら、サンタクロースはニコニコしながら煙突からそっと出て行く。その後、トナカイが曳くそりに乗り、2匹のトナカイがそりを空に向かって走らせ、去っていく。

場面⑦：プレゼントをみた2人の子供が喜ぶ様子

1人の子供（兄）が目覚め、まだ眠たそうな表情でプレゼントに気づき、驚いた顔をした後嬉しくてたまらず、隣に眠っている子供（弟）を揺すって起こす。プレゼントを2人で見て、ハイタッチをして、手を取り合って何度も一緒に跳びはねてサンタクロースからプレゼントをもらったことを喜ぶ。

場面⑧：上空で微笑むサンタクロース

サンタクロースは、上空で2人の子供がプレゼントをもらって喜ぶ様子を見届け、トナカイと一緒に微笑みながら大きく頷き、サンタクロースとトナカイは空に去って行った。

2) 演じて気づいたこと

①非言語による表現

- ・観客に伝えるためには言葉だけでなく動作で伝える方法でもかなり伝わると感じた。
- ・サンタクロースやトナカイが子供の喜ぶ姿を見て満足そうな表情をするのを見て、内面的なことは言葉よりも表情といった非言語の方がよく伝わると思った。
- ・テーマが幅広いものであったので、物語を言葉なしの動作で表現することは大変だった。
- ・役柄をイメージしながら演じるようにすればすんなりと非言語で表現できたように感じた。

②非言語で伝える技術

- ・観客に伝わるように演じるためには動作だけでなく、顔の表情の豊かさも必要だと感じた。
- ・非言語による表現をする場合、演じる人と意思を疎通させながら演じることが大事だと思った。
- ・伝えようとする必要があると思った。

③無生物の表現

・演者がトナカイの角辺りに指を持っていくだけで、トナカイの角であることが伝わってきたため、人以外の存在を動作で表現することは容易だと思った。

④言語的コミュニケーション

・演技中、思わず言葉を発しまったため、普段言葉に頼りきっていると感じた。
・自分の気持ちを伝えるときは言葉で伝えるべきと考えてしまうが、非言語で演じてみると表情や仕草の方がよく伝わる時もあるため、言葉も動作も重要な表現手段だと感じた。

3) 演じた感想

①演技前の非言語による表現のイメージ

- ・冬のイメージをひとつのストーリーとして非言語で表現するのは難しいと感じた。
- ・最初、動作で表現することを考えるのは難しく、考えがまとまらないように感じた。
- ・演じるテーマは思いついたが、非言語で表現することを考えるのは難しかった。

②非言語による演技の伝わり方

- ・演じた後、観客から分かりやすかったという感想が多かった。
- ・非言語で演じてても観客はイメージしやすかったと感じた。
- ・イメージしやすい題材であれば、非言語による表現でも観客にはわかりやすいと思った。

③非言語による表現の戸惑い

- ・言葉を使わずに非言語で表現して、果たして観客に伝わるのか不安を感じた。
- ・同じグループのメンバー間では、クリスマスを表現するストーリーが出来上がり、共通のイメージを抱いて演じていたが、観客にそのイメージが伝わっていたかどうか不安だった。
- ・非言語だけで演じることに不安はあったが、観客の感想を聞くとかなり伝わっていると感じた。
- ・演じていたときはクリスマスのことを演じていることが伝わっているかどうか不安だったが、演じた後、観客の感想を聞くと、非言語で表現したことすべてが観客に伝わっていたため安心した。

④非言語による表現の難しさ

- ・言葉を使わずに非言語でどのように演じればいいのかを考えることは大変だった。
- ・言葉が詳細な情報を伝えるために重要な手段と感じたが、感情を伝えるには非言語的表現の方が伝わりやすい場合もあると感じた。
- ・言葉がなくても伝わらないということはないため、非言語による表現も重要と思った。
- ・演技中思わず言葉を発しそうになったので、非言語で自分の思いを表現するのは難しいと感じた。
- ・非言語だけでは、伝えることが難しい場面があったため、言語の大切さも感じた。

⑤非言語による表現での留意点

- ・動作で表現する場合、観客にわかりやすいように配慮する必要があると感じた。

⑥非言語による表現の楽しさ

- ・非言語で或る場面を演じることは難しかったけど、言葉で表現するよりも楽しいことと感じた。
- ・言葉を使わなくても物語としてうまく伝えることができていると感じた。
- ・皆と一緒に考えたり1つの場面を作ったりすることは楽しかった。

Ⅲ．考 察

心理劇のウォーミングアップにおいて、言葉を使わずに動作だけで季節の表現をした後の参加者の気づきや感想から以下のことが考察される。

演じて気づいたことについては、2グループ共、非言語による表現、非言語で伝える技術、無生物の表現、及び言語的コミュニケーションに関する記述から成っていた。非言語による表現に関して、参加者はある場面を動作で伝えることができていると感じていた。内面的なことについては言葉よりも表情等の非言語の方がよく伝わること、各自がその場の雰囲気に合わせて自主的に演じていたこと、及び各自の自由意思による表現が多かったこと等の気づきがあった。非言語コミュニケーションのうち媒体として身体部位を用いる身体動作をさしてボディ・ランゲージということがある。これは対人関係の円滑な運用に重要な要因であり、社会的スキルという総合的な観点からも重視されている¹¹⁾。このため、非言語によってある場面の状況や想起した感情を表現し、他者に伝えることができるだけでなく、非言語による表現をするには自由意思に基づいて自発的に表現する必要があると推察される。

コミュニケーションとは、発信者の行為が受信者の気持ち、知識、思考、行為などに影響を及ぼしていく過程である。発信者と受信者がお互いに影響をしあって、気持ちや知識などを伝えあい、共有するようになり、人間関係ができたり変わったりすることになる¹²⁾。つまり、他者とコミュニケーションをとるためには、自分の気持ちや情報を言葉、身ぶりや表情あるいは他のサインによって相手に伝えようとしなければならない。自分の気持ちや情報を伝えたい相手との間で共有することができれば、コミュニケーションがとれていると捉えられる。このため、非言語で伝える技術に関して、相手に伝えようとする意思が求められること、相手に伝えるためには顔の表情の豊かさも必要なこと、及び一緒に表現する人と意思を疎

通させる必要があること等の気づきがあったのは、演者同士あるいは観客との非言語的コミュニケーションが成立していたためだと考えられる。

非言語的コミュニケーションとは、他者との関係においてある心理状態を伝達する過程である対人コミュニケーションのうち、言語記号による意味を手がかりとする言語的コミュニケーションに対する概念であり、言語記号以外の手がかりから成る過程である¹³⁾。非言語による演技は、言葉のような明確な意味を伝えるのではなく、あるイメージを伝える性質を持っているため、演者は身の周りの物等無生物を非言語で表現しても不自然な感じがしなかったのであろう。

参加者は非言語だけで演じてみると、言葉の方が詳細に短時間で表現できること、言葉が重要なコミュニケーション手段であること、及び日常生活では言葉に頼りきっていることを感じていたため、言語的コミュニケーションの意義を認識したことが窺える。一方、演じてみると表情や仕草の方がよく伝わる場合もあるため、非言語も重要な表現手段だとの認識も示されていた。このため、非言語による表現は、言語と非言語による両方のコミュニケーションの意義を捉えるように作用したと考えられる。

参加者の感想から、演技前の非言語による表現のイメージとして、動作で表現することは難しいため言葉でないと伝えられない、或いは言葉を使わずに他者に伝えるのは難しいと思っていたのに、意外にも伝わっていることが示された。非言語による表現で戸惑ったのは、観客に表現している内容が伝わっているのかがわからないためであった。また、非言語で表現する難しさを感じていたことや、非言語による表現では観客の気持ちを察したり、わかりやすいように配慮したりする気遣いが必要なことがあげられていた。さらに、非言語で演技をすると相手に伝わるように工夫をすることが多いこと、無生物も表現できること、及びその場の雰囲気は表情で伝えられること等の非言語による表現の楽しさを感じていたことが窺えた。このことは、参加者が言葉を使わなくても表現したい様々なイメージを自由に思い浮かべ、それを動作や表情等で表現してイメージや心情を伝える性質を認識したことを表していると推察される。

以上のように、非言語による演技を行った感想は、演技前の非言語による表現のイメージ、非言語による演技の伝わり方、非言語による表現の戸惑い、非言語による表現の難しさ、非言語による表現での留意点、及び非言語による表現の楽しさから成り立っていた。したがって、これらは非言語的コミュニケーションを捉える視点とみることができよう。さらに、心理劇の意義については、クライアントがさまざまな役割を演じることを通して、内的葛藤や体験を表現することにより自己洞察へと導くと同時に、新しい役割を演じることを実感しながら学習することとされている¹⁴⁾。このため、演者が非言語による表現に戸惑うという内的葛藤が生じたのは、非言語コミュニケーションの体験が参加者の自己覚知を促すように作用したためと考えられる。

IV . 結 論

本研究では、心理劇を活用した非言語的コミュニケーションに関するソーシャルワーク演習を通して、次のことが考察された。

- ①非言語による表現をするには自由意思に基づいて自発的に表現する必要がある。
- ②非言語で伝えるには相手に伝えようとする意思、表情の豊かさ、相手との意思の疎通が必要となる。
- ③②の気づきがあったのは相手との非言語的コミュニケーションが成立していたことによる。
- ④非言語による表現は、言語と非言語の両方のコミュニケーションの意義を捉えるように作用する。
- ⑤動作や表情等で表現すると、イメージや心情を伝える非言語的コミュニケーションの性質を認識できる。

⑥非言語的コミュニケーションを体験すると自己覚知が促される。

引用文献

- 1) 本間昭 痴呆性老人の介護者にはどのような負担があるのか 老年精神医学雑誌 10(7) 787-793 1999
- 2) Ladislav V, Ann H (村井敦志監訳) 重度痴呆性老人のケア 医学書院 2000
- 3) 竹内孝仁・氏家幸子 系統看護学講座専門19 老年看護学 医学書院 1998
- 4) 小林隆児 自閉症の発達精神病理と治療 岩崎学術出版 1999
- 5) 松山郁夫・米田博編著 障害のある子どもの福祉と療育 建帛社 2005
- 6) 室伏君士 痴呆老人への対応と介護 金剛出版 1998
- 7) Linda A. Hodgdon . 訳：門眞一郎 長倉いのり 自閉症スペクトラムと問題行動 星和書店 2009
- 8) 台利夫 新訂ロールプレイング 日本文化科学社 2003
- 9) 松山郁夫 ソーシャルワーク演習において心理劇を活用する意義 佐賀大学文化教育学部研究論文集 15(2) 249-256 2011
- 10) 松山郁夫 自己覚知に関するソーシャルワーク演習の実際 - 心理劇を活用した相談援助演習を通して 佐賀大学文化教育学部研究論文集 15(2) 257-266 2011
- 11) 中島義明 安藤清志 子安増生 他編 心理学辞典 有斐閣 716 1999
- 12) 岡本夏木・清水御代明・村井潤一監修 発達心理学辞典 ミネルヴァ書房 221 1995
- 13) 同上11)
- 14) 小林司編 カウンセリング事典 新曜社 119-120 1993

参考文献

- 秋山博介・谷川和昭・柳澤孝主責任編集 福祉臨床シリーズ編集委員会編 相談援助演習 弘文堂 2008
白澤政和・石川久展・福山和女 日本社会福祉士養成校協会(監修) 社会福祉士相談援助演習 中央法規出版 2009
増野肇 集団精神療法としてのサイコドラマ 金剛出版 1990
台利夫 臨床心理劇 プレーン出版 1982

謝 辞

本研究に協力していただいた方々に感謝致します。